④-1

育児期の母親のネットワーキングによる孤立の解消とエンパワーメント
ギャルママはママサーに何を期待したのか

○髙橋香苗（明治大学・院）

今日の子育てにおいて、子育て仲間、ママ友は重要なアクターの一つである。母親の育児不安や育児ストレスが母親の孤立した子育ての状況を背景にしていることが指摘され、母親同士のネットワーキングも重要視された。とりわけ保健所や保健師など母親の育児をサポートする実務者は母親のママ友づくりを促してきた。そうした状況の一方で、ギャル系のファッションを好む母親である「ギャルママ」は、ギャルママ同士で子育てネットワークを展開させているという特徴がある。その理由として、たとえば新聞記事をよみとくと、母親自身の外見が原因となって周囲の母親から排斥されている感覚や孤独な状況におかれているため、似たもの同士でネットワーキングしたという流れをくみとることができる。ギャルママを読者に想定し発行されていた雑誌『I LOVE mama』ではギャルママサークル、いわゆる「ママサー」に関する記事が定番ネタの一つになっており、元編集長はギャルママは少数派であるからこそつながり合うのだとインタビューで話している。またその誌面ではママ友と園ママの違いが語られており、すなわち幼稚園や保育園の保護者として知り合う母親（園ママ）と自分と趣味が合って仲良くできる母親（ママ友）とは、異なるものとして位置づけられている。こうした感覚は一般にも共有されているものだと考えられるが、はっきりと線引きしていることがうかがえる。このように子育てというテーマで広く結びつく母親同士のネットワークに距離をおき、似たもの同士の結びつきを重視するギャルママは、ママサーに何を期待していたのだろうか。当事者にとってそれはどのような意味をもつ存在だったのだろうか。

育児サークルの機能には育児の相互扶助や母親の不安の解消、育児に関する学習、子どもの発達促進などがあり、これは実用性が高いネットワークであると考えられる。一方で育児サークルやママ友は母親同士という関係性だけではなく個人としても重要な関係性でもある。しかしサポーティブな関係性であるがゆえに母親であることが優先されるため、個としての関係性は築きにくいことが指摘されている。既存研究が明らかにしてきた育児サークルの機能やママ友との関係性について、ギャルママにはどのような特徴が見出されるのだろうか。

本研究では、ギャルママのライフスタイルに関する調査として東京と大阪・奈良で 2019 年 8 月から 10 月にかけて実施したインタビューの一部を用いる。調査対象者は 11 名のギャルママで、そのうちママサーに参加したことがある 9 名を中心にしたい。分析では、ママサーに入る前の子育ての状況について確認した上で、どのような経緯でママサーに参加したのか、具体的にどのような活動をしていたか、それが当事者にとってどのような意味をもつ存在であったのかを検討していく。さらにギャルママではない周囲の母親との関係についても探る。

その結果、子育てという共通の課題に向き合いながら自分らしくいる場としてママサーは機能していたことがわかった。ママサーに入る以前のギャルママは孤立した状況に置かれていたが、ママサーに入ることで仲間を獲得し、そこから情緒的・手段的なサポートを得ていたことがわかった。さらに母親の名前で積極的に呼び合うというような個としての場、関係性の構築があったことも示唆された。メディアが主催する撮影会への参加もママサーとしての活動の一つに位置づけられており、ギャルママにとってママサーは、子どもと一緒に参加でき、かつ、自分の好きなおしゃれを友人と楽しむ場であったことが示唆される。しかしこのネットワークは地域性に乏しい側面があるため、一般的な育児サークルと比較すれば、サポート力が弱いことも指摘できる。たとえば母親同士の居住地域が離れているため、病院選びや幼稚園選びでは情報交換したくでもできないという事情を抱えることがわかった。ギャルママではない母親との関係性のなかでは、ファッションの点での違いを認識している一方で、別に仲間に加わりたいとは思わないのでファッションを変える必要もないという語りがあったことから、ファッションが包摂と排除の記号として使われていることも明らかになった。以上のように、ママサーがどのような役割を果たしていたのかを検討した結果、それは育児サークルのもつ従来的な機能に加えて、個としての自分が保たれる場所としても機能していたことがわかった。彼女たちはこうした営みを通じて母親としてだけではなく自分らしくいられる方法を模索していたことが示唆される。

キーワード：母親、ネットワーク、ギャルママ